

バイロンの『シヨンの囚』一考察
A Study of Byron's *The Prisoner of Chillon*

——その感傷と現代——
——The Sentimentality and the Present Day——

黒 田 修
Osamu KURODA

ここにこんな言葉がある。

And the whole earth would henceforth be (1)
A wider prison unto me :

それにもうこれからは私にとって
地球全体が広大な牢獄なんだから：

これは本論で取り上げる詩人バイロン（George Gordon, Lord Byron）28才の時の作『シヨンの囚』（*The Prisoner of Chillon* : 1816年）の中の二行である。「地球全体が広大な牢獄」などというのは、ちょっと聞いた限りではいかにも大袈裟で感傷的な表現であるが、そしてこのような誇張表現はほんの一例であって、この作品に限らず他のどの作品にも随所に見られるものであるが、このような大袈裟とも思われる表現に込められた心情は、当時流行の世界苦（Weltshmerz）に覆われている時代にあっては憂愁に満ちた魅惑の情感を誘い人々を駆り立てずにはおかない筈のものであった。事実バイロン現象が生じた程詩人の作品は勿論のこと詩人自身ももてはやされた時代があった。それが今日世界的にバイロン熱が冷めてその作品がもはや読まれなくなりつつある、そして何れは読まれなくなるのではないかというようなことがよく言われたりする。事実そうなのだろうか。この『シヨンの囚』はどうであろうか。これもいずれ読まれなくなってしまう作品の一つなのであろうか。

この作品は、1816年6月終り頃詩人がシェリー（Percy Bysshe Shelley: 1792-1822）と共にスイスのジュネーブ湖（Lake Geneva）⁽²⁾に沿ってルソー（Jean Jacques Rousseau : 1712-1778）縁りの地を旅し、その湖畔に今も実在するシヨンの城（the castle of Chillon）を訪ねた時、そこで聞いた話に想を得たものである。詩人自身の脚色により実際と異なる

バイロンの『シヨンの囚』一考察

るのは当然ながら、作品では城の地下牢に囚えられた実在の人物ボニヴァー（François Bonivard : 1496?⁽³⁾-1570）は聖なる自由の戦士として大幅に美化され賛美されている。つまり英雄伝説の形をとったこの物語詩は、いわゆるバイロン風＜英雄もの＞⁽⁴⁾の系列に属する。そして世評では殊にこの系列のものとされる作品が『ドンジュアン』（Don Juan）に代表されるもう一つの系列である＜風刺もの＞⁽⁵⁾に較べて顧みられることが殊更少なくなってきたように言われている。が、全体として又趨勢としてそういうことが言えるとしても、果たしてこの二つの系列に分けて別物としてしまえるものかどうか疑問であるし、たとえ類別できるとしたところで、それぞれの系列の中でも作品によっては後世の評価に浮き沈みが当然考えられるから、これからも読むに耐えるかどうか個別的に当る必要がある。その点この作品はどうであろうか。後世読むに耐えるものであろうか、少なくとも現代に於てどうであろうか。

確かに、詩人の言葉それ自体には独自の魅力は乏しいように思える。しかし詩人が新しいヴィジョンやイメージをもとに魅力となる言葉を練り上げ鍛え上げるという努力をしていないのは、その創作態度⁽⁶⁾を考えれば無理からぬことと思われる。何かに触発されて自身でも抑制のきかない心情^{ほとばし}が迸り出てそれが紙面にぶつけられるというものであるからには、どうしても言葉自体は陳腐で出来合いの口語的散文的なものとならざるを得ない。しかし冒頭に引用した「地球全体が広大な牢獄」という表現にしても、何の変哲もない言葉の羅列にすぎないのであるが、そこに込められた心情を思う時、それが詩人の宇宙的絶望のポーズ⁽⁷⁾であろうとなかろうと、その悲愴感⁽⁷⁾は実にはなほだしい。バイロン熱を体験しなかった世代の一人として初めから醒めてはいても詩人が表すところの心境には身につまされる思いがする。それは、この作品に限らず詩人の作品の生命が実は言葉自体でもなければ思想でもない、むしろ言葉に込められた心情そのものにこそあるからだと思う。もっとも、冒頭の引用だけでは詩人が作品全体にぶつけた心情がどういうものか、そしてそのエネルギーの規模がどれ程のものかその全体は伝わらない。そこに込められた感情がどういふものかを知る為、まずこの物語詩の展開を追うことにする。

主人公の父親が国の自由を奪おうとする＜時の権力＞に抵抗し、その信条を曲げなかったばかりに一族諸共捕えられ、その老齢^{もろとも}の父親と六名の若者のうち一人とは火刑に二人は野にて処刑され、残りの三兄弟は互いの顔も見えないほの暗い城の地下牢にそれぞれの柱に鎖で繋がれ、そのうち長男である彼のみを残して二人の弟達も次々と死んでいった。近くにいながら鎖に繋がれているため為す術もなく弟達が死んでいくのを唯見守るよりしかたなかった彼は、それでも最愛の末の弟が死ぬのが分った時には渾身の力をふりしぼって鎖をひきちぎり駆け寄った、が魂はもう抜け去った後だった。この弟の存在は彼をこの忌まわしい地上に引き留める唯一の絆を意味した。その絆も切れた今、自身に訪れる獄死

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

を控え無為に過した歳月のうちに四肢が衰え髪が白くなり愛する者の全てを失い地上の前途に何の希望もないまま生きることになっているのは、自分の気が済むだけの為に死んではいならないという信条が自殺を差し止めているからにすぎなかった。

肉親の最後の一人である末弟を死というものによって奪われた彼は衝撃の余り放心状態にあったが、その朦朧とした心身の麻痺のうちに何処か透き間から入って来た小鳥の声を聞く。楽園（天上）からの訪問者(A visitant from Paradise)⁽⁸⁾か、はたまた死んだ弟の魂が降りて来てくれたかと喜ぶのも束の間その小鳥も飛び去ってしまうと、又もや弟に二度までも去られた気持ちになり二重の孤独感に襲われる。

がそのうち運命に変化が起きて、番人達に同情が芽生え鎖が外れた状態のまま牢の中である程度の自由が許されるようになり、彼は壁に足掛かりを作る。が勿論逃亡しようとしてではない。足掛かりを作ったのは他でもない唯好奇心から外の景色特に高く聳える山々を一目見たかったからである。しかし、山々やその頂に被る雪そして広くて長い湖・奔流となって進む川・遠くに白く壁のように見える町・緑の小島や湖の魚それに自由に空を飛ぶ鷺を臨むうち、新たに涙が目に浮かんできて心が乱れ自由奔放で勢いのある外光に触れたことを後悔して下に降りる。と再び暗い牢の闇が重くのしかかってきてちょうどそこが新しく掘られた墓穴のように感じられるが同時にそのような休息の場が欲しいと願う。

時を経てもはや長い付き合い故に蜘蛛や虻それに自身の鎖とも友達となっていた頃、どういう訳か遂に解放されるという運びになった時には地下牢が自身の一部となっていてそこから引剥されるように思い、^{そと}外の自由を再び得ることがむしろ苦痛となって吐息が出る程であった。

これがこの作品の顛末であるが、作品に盛られた感情を見るということで主人公の心境の変化に沿えば物語は五つの出来事（①主人公達兄弟が地下牢に入れられる ②主人公の弟達の死 ③小鳥の来訪 ④外光を臨む ⑤解放される）に整理される。これらのうち最も劇的な変化として描かれているのは⑤の解放されるところかというところではなくて②の弟達の死の方である。というより主人公の心境は根本的には弟達の獄死を境にして大きく変り、変化したのは後にも先にもその一回だけというのが正しい。その状況の違いは弟達が居るか居ないかだけのことなのだが、主人公にとってはその差違がとてつもなく大きいのである。だから弟達の死後③④⑤それぞれ何れの時点に於ても意気の高揚と消沈という起伏は見られるものの、結果的には弟達が居なくなった時の、たとえ何処へ行こうとも牢獄の中だ、という心境をそれぞれの時点で改めて思い知らねばならないだけのこととなっている。

I made a footing in the wall,

(9)

バイロンの『シヨンの囚』一考察

It was not therefrom to escape,
 For I had buried one and all
 Who loved me in a human shape ;
 And the whole earth would henceforth be
 A wider prison unto me :
 No child—no sire—no kin had I,
 No partner in my misery ;

壁に足掛かりを作った、
 がそこから逃げようと思ってのことではなかった、
 というのは私は既に誰も彼も葬ることになってしまっていたからだ
 それも人間の形をして私を愛してくれた人全てだった；
 それに、もうこれからは私にとって
 地球全体が広大な牢獄なんだから；
 子供だって、親だって、肉親は誰もいないんだ、
 この惨めさを分ってくれる連れはもう一人もいない；

主人公が地下牢の壁に足掛かりを作ったのは外光を臨む為であって逃亡する為ではない（この辺り、生き残って核シェルターから外を覗こうとする心理を連想させる）旨を述べる一節である。要するにこれが③④⑤それぞれの時点で改めて認識される最早弟達の居ない心境である。これには実は冒頭に引用した二行が含まれている。あの二行は、作品全体の核となるこの心境のその又核の部分で言うなれば核中の核であった。「地球全体が広大な牢獄」というような表現はこの心境の特に最後の行「この惨めさを分ってくれる連れはもう一人もいない（no partner in my misery）」という境地から絞り出されてくる。ちょっと聞くといかにも大袈裟なあの二行も肉親の全てを失った本人にしてみれば、その口から「地球全体が」という言葉が飛び出したとしてもさほど無理はないどころか至極当然だという気がする。それに、詩人によって主人公の肉親達特に弟達に付与された性格を考えると、彼等全てを失ってしまったものにとって「地球全体が広大な牢獄」というのは文字通り素直に受けとるべき表現だと言えよう。

殊に末の弟はその外観も性格も特に＜美しいもの愛おしいもの＞の典型として地上の存在であるよりむしろ天上の自由を象徴するちょうど天使のような存在として描かれている。③のところでも死んだ末弟が小鳥とダブリ羽の生えた天上からの使者を象徴している。このような天上あるいは自由の象徴はここだけに限らず作品のそこそこで聖なるものを表す色や数や生物などのイメージやシンボルとしても見られる⁽¹¹⁾のであるが、実は詩人は

“Sonnet on Chillon” と題した 14 行詩をこの物語詩の表題よりも前に出してこの作品の頭部を飾っており、しかもそれが作品全体を象徴するものとなっている。

Eternal Spirit of the chainless Mind!
 Brightest in dungeons, Liberty! thou art,
 For there thy habitation is the heart—
 The heart which love of thee alone can bind ;
 And when thy sons to fetters are consign'd—
 To fetters, and the damp vault's dayless gloom,
 Their country conquers with their martyrdom,
 And Freedom's fame finds wings on every wind.
 Chillon! thy prison is a holy place,
 And thy sad floor an altar—for 'twas trod,
 Until his very steps have left a trace
 Worn, as if thy cold pavement were a sod,
 By Bonnivard!—May none those marks efface!
 For they appeal from tyranny to God.

(12)

とらわれることなき心を表す不滅の精神よ！
 地下牢にあって最も輝く、＜自由＞こそ汝なり、
 かような所にあれど汝の住居は胸の内にこそあるからだ——
 それも汝自由を愛する心のみが縛りうる胸の内だが；
 汝の息子達が拘禁の羽目に追いやられ——
 鎖をはめられ、湿った地下室の陽を見ぬ闇の身となるも、
 彼等の国は彼等の殉教によって勝利を得、
 ＜自在＞の風聞は風吹くところ何処へもはばたき飛んでゆく。
 ションよ！ 汝の獄は聖所だ、
 そして汝の悲しみの床は供物台だ——踏まれるうち、
 やがて歩みそのものために足跡が残ったからだ
 それも汝の冷たい床張りが芝地であるかのように摩り切れた、
 ボニヴァーの歩みによって！——その痕跡を消す者が一人も無からんことを！
 それらこそ暴虐の世界から神に訴えかけてくれるものだからだ。

このソネットに明らかなように、しかもそれが作品の頭部に来ていることによってその

バイロンの『シヨンの囚』一考察

意図された役割通り作品全体はその象徴によって聖化を受ける。だからこそ意識されてかされないでか恐らくは無意識のうちにであろうが作品中にも聖なるイメージやシンボルがちりばめられることになったりするのである。シヨンの地下牢も囚われの主人公ボニヴァーも全てが聖化されるから作品では何もかも聖別された虚構の存在となる。人間である限り現実には俗の部分も必ず持ち合わせていなくてはおれないものであるから、聖化されたボニヴァーは当然実像のボニヴァーではなく詩人の英雄の投影像である。故に聖別された英雄の信条としてそのエネルギーは通常のレベルをはるかに越えて肥大したものとなる。ここに詩人の心情（感傷）が大袈裟なものとして写る所以がある。しかし詩人にとってはそれも必然的な意味合いを持っているのである。

詩人の目に写ったシヨンの地下牢は聖なる拝殿である。その床は供物台であり、その台が摩り切れる程常にその上に供物として自らを運び置く主人公ボニヴァーは正に犠牲^{いけにえ}そのものである。それではそれは何に捧げる犠牲か。この地上では見えない＜自由＞という神である。主人公及びその肉親は全てその神の息子達でしかもこの地上では迫害され受難する人々である。肉親である弟達は勿論＜美しいもの愛おしいもの＞である＜自由＞を体現するものであってこの地上で唯一主人公に連なる血筋である。彼等が死んだことによって主人公にとっては最早地上に自由を発揮し交歓し得る連れ（partner）が一人も居なくなってしまった。こここのところで「地球全体が広大な牢獄」という表現を捉え直すと、唯肉親が失われたというだけにとどまらず、地上に自由そのものが絶えて文字通り「地球全体が広大な牢獄」となるその象徴的な意味も見えてくるのである。弟達肉親を全て失ったことは＜美しいもの愛おしいもの＞の永遠の喪失を意味し、その性質を有する天上の血統を一切地上に失ったのと同義であった。＜死＞という「暴虐（tyranny）」によって弟達肉親に象徴される＜自由＞という＜美しいもの愛おしいもの＞が奪われその＜美しいもの愛おしいもの＞が反映し合う＜連れ＞が失われてしまって、正に心通わす相手もなく主人公一人孤立したままこの地上に幽閉されてしまったことになる。故に主人公の居る地下牢は既に自由の意味を喪失した＜自由＞の形骸を収める「墓穴（grave）」⁰³同然となり、地上では最早行き場のない＜自由＞にとって「地球全体が広大な牢獄」と化すのである。

At last men came to set me free,

04

I ask'd not why, and reck'd not where,

It was at length the same to me,

Fetter'd or fetterless to be,

I learn'd to love despair.

とうとう男達が私を解き放ちにやってきた、

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

何故かなどと聞きもしなかった、何処へかということも頓着しなかった、
 もはや私にとっては同じことだったからだ、
 繋がれていようがいまいがどちらでも、
 絶望を愛するようになっていたからだ。

これは⑤の地下牢から解放される時点での主人公の心境である。「絶望を愛する (love despair)」というこの表現も大袈裟には違いないが、脈絡として「地球全体が広大な牢獄」と化した今どちらを向いても何処に行ってもそこは牢獄の中であるから、地上に居る限り真に解放の希望はないということである以上、その心情としては当然の帰結であろう。そのような地上で生きていく為には残っている感情としての絶望を糧にしてそれと共生していくしかない。それが「絶望を愛する」というような表現になるのであろうが、考えてみれば凄まじくも^{ひど}惨い状態である。

そこでもう一度顧みるべきは、この物語詩に見られる感傷が単に肉親達を失って悲嘆に暮れるというレベルに留まらず、尋常の人間とは異なる聖別された英雄規模の心情が込められ謳い上げられているということである。＜自由＞に殉ずる血統が自分一人となった瀬戸際のところで踏んばって耐えたその行為に人々が共鳴し、その国が勝利を得て地上に自由の火が消えずに済んだということで主人公を英雄として称えているのである。暴虐故に「絶望を愛する」とまで言わずにおれない主人公、そこに感傷は確かにあるが、そのように苦悩する主人公を自由のための戦士として英雄化し聖別し偶像化するところに詩人の反逆精神が現われている。しかもそれは檄の性格を帯びているのである。それは自由の戦士を殉教者として聖化し賛美することによって彼を苦しみ自由を侵害したものを敵として立ち向かうよう世の人々を焚き付け駆り立てる情熱であるが詩人の特性であるそのような情熱ももうその生命^{いのち}を失い、果して今日意味を持たなくなっているのではあろうか。

もし詩人の作品が、少なくともこの作品が読まれないとしたら、詩人の悲愴感溢れる反逆精神が現代に通じないということになるのであるが、残念ながら現実にはどうもそのようである。現代に於ては詩人の反逆精神が檄としての生命を保ち得なくなってきたというようである。実際のところ表面的には主人公の感傷が何かこちら側の現実とは感覚的に遊離し大層時代がかっているという印象は免れない。又、主人公の悲愴感にしてもただ極めて大袈裟に写ってしまうだけとなりがちである。しかし、もし現代人の多くがそのように感じるとしたら、なぜそのように感じるのかそここのところこそ問題としなくてはならない。

考えてみれば、現代人にとって地球は正に広大な牢獄である。望みもしない核の脅威に地球規模でおののきながら、経済とかイデオロギーとかいった目に見えない手枷足枷に縛られて他に逃げ場のない地球という殆ど希望の光の無い所で、その惨めさ (misery) を真

バイロンの『シヨンの囚』一考察

に分かち合う連れもなく絶望を愛するより他ない言わば無間の孤独地獄に囚われている。四方八方核の脅威という壁に閉ざされそこから出る望みもないように思える現代人は正に〈シヨンの囚〉そのものではないか。そのような詩人の表現通りの状況にありながらこの作品に込められた心情が直に駆り立てとなって来ないのは何故であろうか。それはやはり現代という時代の所為もあるかもしれない。というのはもし詩人の飛ばす檄に現代人一般も躍ることがないとしたら、現代には詩人がもてはやされた時代ほど余裕が無いからだと思える。まだ余裕のある——世界苦を片手に酔える——時代であれば、まだ世直しでも出来そうな余地の感じられる時代であれば、まだ希望の持てそうな世界であれば、詩人の反逆の精神を支える情熱は十分にその力を発揮する筈であるが。

印象として作品の大袈裟で 嘘っぽいと感じられる部分（「地球全体が広大な牢獄」とか「絶望を愛する」とか）が実は現代に於ては正に現実そのものであるのに、その現実に対してどうしようもないという方法論の欠如故に（といっても為す術がないと信じ込んでいるが故にのことなのであるが）、既に自らの内に裏切られているので詩人の言うところが白々しく感じられるのであろう。当時熱を持って読まれている時代に於ては、むしろ逆に、大袈裟ながらそこにまだ個人の力で何とかなる余地を感じ、詩人の言うところがたとえ大言壮語であろうと現実とのギャップを物ともしない気宇壮大の念が莫大な推進力として人々の希望を駆り立て得たのであろう。革命を期待し得る時代では一人一人が立ち上がれば何とかなるという気運があった。だから詩人の〈英雄もの〉も人々を駆り立てる力とはなった。しかるに現代に於ては、個の反逆精神ではにっちもさっちもいかない複雑怪奇と思えるような世界には、最早通用しないという失望感が浸透して個我は没してしまっているし、自分一人何をしてみたところで所詮何の足しにもなりはしないという信仰も又行き渡ってしまっている。そこで殆ど直感的に、詩人が、少なくともこの作品が、面白くないように思えてしまうのではなかろうか。

だからといって詩人にあるのは反逆精神と単なる感傷だけだと見てしまえばこの作品なども現代に全く意味を持たないものとして退けられてしまう。が、しかし本当にそれだけのものであろうか。そうではないという気がする。むしろ現代という時代との関連でこのような時代に位置するが故にこそ何かを見逃しているために詩人に意味を見出し得ないということになっているのではなかろうか。

詩人の表現に至る感情の源を探るようにしていけば、現代人も自身まだはっきり認識できていない部分まで含めて自分自身の内奥に突き当る、そういう読み方をすればこの詩人が再評価できるのではないか、又そういう視点からなら感傷的な〈英雄もの〉とされて尚軽んじられる傾向にある系列の作品も見直してみることが出来るのではないか、そして事実そうすれば案外現代いや何時の時代にも普遍的に通じる人間自体の難題がより深く掘り下げられもするのではないか、という気がしてくる。何故なら詩人の場合その反逆精神に

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

見られる感情が意識の深部に根差したものであって、人類普遍の〈怒り怨み〉がその本質であるからである。「地球全体が広大な牢獄」，「絶望を愛する」——この作品全体を代表する主人公のこれらの表現には詩人の怒り怨みの感情が潜伏している。弟達の死と共に〈美しいもの愛おしいもの〉を永遠に失った悲しみ，残された者の希望のない恐ろしさ，そして怒り，そこから感じられてくる切なさ^{はかな}儚さ，諦め切れないが諦めざるを得ない怨み，そういった感情を死をもたらししたものに対してぶつけているのである。つまり殉教者賛美の裏に怒り怨みの念が隠れている。

それを考えると、現代ではそのような感情が受け入れられる余裕も可能性も確かに少ないように思われる。本来その怒り怨みの感情は激情となって人々に波及し、それが集団となって何らかの対象に向かうものであるが、〈怒り怨み〉を向ける対象がはっきりしていれば集団はその憤懣をそこへぶつけることが出来るし、実際そのようにするだろう。しかし現代のように世界が複雑で見えない、また得体の知れない感じである場合、たとえその感情があっても捌け口が見当たらなければ、そのエネルギーを向けようがない。あたかも巨大な怪物を前に現代人は既に^{おび}^{すく}怯え竦んでしまっているかにみえる。現代に於ては〈美しいもの愛おしいもの〉を奪う核戦争や癌に象徴される脅威が自由を侵害する〈時の権力〉に相当すると思えるが、そのような対象を前にして現代人一般は意気阻喪⁽¹⁵⁾していて自身確認してみることもないまま心の底では早々ともうどうしようもないのだと既に投げ出してしまっているのではなからうか。意気阻喪⁽¹⁵⁾しては詩人の作品は面白くない。詩人の感傷も徹も奮い立つどころか空々しく響くし且つ暗く重くうとうしいだけということになる。

だからといって詩人のこの檄の情熱に刺激され駆り立てられないとしたら、果たしてそれは時代の所為であって詩人の方に何時の時代にも耐える生命がないからだ単純に割切ってしまうでもいいものだろうか。むしろこのように考えられはしないだろうか：こんな時代でも、現代人一般の方が異常に損なわれ捻れ歪んでしまっていて「希望 (hope)」の確信を捨てるようなことにさえなっていないければ、詩人の情熱はこの現代にも十分に通用するものである、と。このように考えるのでなければ、仮に「地球全体が広大な牢獄」になってしまっているので「絶望を愛する」のだと言わずにはおれなくなっているがそれは仕方がないと諦め顔でいるならば、蛇に睨まれた蛙と同じで脅威から自身の目を逸らし死んだふりをしている現代人は自身のその竦みに気が付いていないことになり、あたかも自ら進んで自身を痺れさせ、詩人の純粋な情熱に不感症になっているとしか言いようのない病人のままであるに留まらず、もし〈希望の確信〉を取り戻せないようなら、人類も文明も何もかも全てを支えている地球自体が非常に危なっかしいことになってしまう。

というのも、この〈怒り怨み〉は何も詩人一人のものではない、普段は無自覚ではあるがそれは人類普遍の情動であって、人間が生きている限り何時の時代も常に全ての人々が引き摺^ずっている生命自体の原始的エネルギーだからである。

バイロンの『シヨンの囚』一考察

はじめに全ての存在を生かす生命エネルギーがある。人間にとって神とも呼べるそのエネルギー自体の原理は＜自由＞そのものであり、そのエネルギーは人間の場合は自我意識の層を通して表出する。自我意識の層は、ちょうど濾過器に当り、そこに個人差が特徴として現われる。その目が詰っている（現実には自我意識に対して諸条件の拘束がきついか、実際そうでなくてもそのように知覚されるかする）と、エネルギーはそれだけ一層勢いよく障害を越えて噴出しようとする。詩人の場合はちょうどこれに当る状態ではなかったかと推察される。肉体的にも精神的にも障害となる束縛を強烈に実感する余り、エネルギーの噴出も爆発的なものとなったのであろう。詩人の自我意識に捉えられた現実の障害は、自身の内部を突き上げるエネルギーを肯定する詩人にとって悪であり暴虐であり、＜怒り怨み＞の対象となり、内部エネルギーは怒り怨みの感情となって対象に向っていく。しかし詩人の場合、その感情を外にばかり向かわせることは既にやめて再度引き戻して自我意識に於て対象を見出しそれと格闘している。この作品に於てソネット部にも物語部にも、主人公が抵抗あるいは反逆したのはどういう自由の侵害か具体的には書かれていない。主人公が抵抗するに至る経緯については極力省かれ、抵抗する姿そのものに表現の殆どが割かれている。対象が具体的でないということは何か目に見えないものに対しての抽象的な抵抗である。それはエネルギーを肯定する詩人の自我意識にとって最大最終の障害（敵）となる＜死＞であり、それは自分の自我意識諸共エネルギーを奪い去ってしまうのだから、もうこれ以上ない暴虐として写る。しかし自我意識にとって＜死＞は全く不可解な代物故に取組もうにも難物過ぎるため詩人にもその戸惑いが見られる（作品中、詩人は＜死＞というものに対して、一方ではそれは極めて「恐ろしいもの（a fearful thing）⁽¹⁷⁾」として又もう一方ではそれを「安息（a rest）⁽¹⁸⁾」として見るといったような矛盾した対応を示している）。もっともこの戸惑いは、少なくとも近代自我を有する者全てにとって共通のものである。自我意識に於てその知性と共に生命を肯定する限り＜死＞はその対極に位置するものとして捉えられる。生命エネルギーと＜死＞は自我意識の上に於ては渾然一体ではなく分極化しているのである。このエネルギーはその性格上一旦覚醒して自我意識のレベルを通過する時、そのレベルで自覚を伴い、例えば＜美しいもの愛おしいもの＞を享受する自由を死に代表される暴虐によって一方的に奪われてしまうとすると、死（暴虐）をもたらしたものに対して怒り怨みの感情と化し留めようもなく内から沸き起こってくるものである。このエネルギーは本来感情の型としては＜怒り怨み＞でなくても感動でもよいし、その捌け口としての対象も何でも構わない、とにかく対象を求めて＜自由＞に捌ければいいのである。ところが現代人は不安のため無自覚のうちに希望を抑えられてしまい、＜怒り怨み＞となるエネルギーの駆り立てられるべき方向を見失って病に陥っている（異常増殖する癌もそのあらわれかもしれない）。というのもこのエネルギーの＜怒り怨み＞の情動への変貌は人間がいて死や悲しみがある限り絶えず生じずには止まない性格のも

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

のであるから、捌け口がなければ不燃焼を起して燻り続けていなくてはならないからである。今まで人々は個人でも又集団でも極まりなく何らかの捌け口を求めてはそれを捌かせてきた。しかし今や現代に於ては時代が時代だけに従来のやり方では捌かせ得なくなった。

人類は世界大戦を二度も体験し意識の上ではもう懲りているにもかかわらず、又非常に愚かしいと思いながら尚も何処かで絶えず戦争を繰り返している。人間はそれ程馬鹿ではないと口では言いながら、しかし同時に第三次世界大戦もあるいは起ってしまうのではないかとも思っている。つまるところそれは既に気持の上で核戦争が起ることも諦め許してしまっているのと同じことで、発想の大転換を計らないで今のまま進めば現実に取り得てしまう可能性は大いにある。何故なら、無意識のうちにエネルギーの捌け口として必ず敵（対象）を求めてしまうからである。しかも習慣的に実際に外に見えるものに対象を求め、それを自由束縛あるいは侵害の敵としてやっつけようとしてしまうが、実は人間の意識を束縛・侵害しようとするものはその窮極としての＜死＞こそが人類の真の敵であり、それも自我意識のうちにこそあるのに、それに気付かないで常に受けている束縛・侵害に対して自覚なく鬱積した怒り怨みの感情が、ごまかしの捌け口ながら現実の手近で安易な敵（国）を求めてしまう。それがこの地上での愚かな争いとなる。核戦争はこれまで抑えて集積してきた人類の＜怒り怨み＞の正に終極の爆発であり、もう今後これ以上はないという＜怒り怨み＞の権化である。とうとうこのような時代の壁に突き当たった現代の我々は、もう何処にも逃げられないところへ来てしまっている。奇しくも詩人が表した「地球全体が広大な牢獄」となったところに我々は位置し「絶望を愛する」ことを余儀なくされる羽目に陥っているのである。期せずして詩人の表している言葉は現代人にとっては今更言わずもがなと思える程余りにも現代の状況そのものをそっくり先取りして描くことになっている上、しかもこの現代の状況は人類史上壊滅的致命的な極限の状況であるから無論どのような時代にも通じる普遍の心理状況である。とはいえ、これらの表現が正に現代の現実を突いていることなど詩人自身は勿論思ってもみなかったことであろう。それはむしろ詩人の意識しているところとは別に、感情自体の普遍性が時代を越えて直観的に知覚したところが求めた表現の半ば自動的な表出であろう。人類に意識が誕生して以来今日に至るまでずっと、感情となる以前の渾沌（人類いや普遍的な生命の根源的なエネルギー）が、解放と自由を無意識のうちに望み外に迸り出ようとするその属性故に、それ自体の障害となるものの解決を意識上に表面化するところで絶えず迫ってきたのである。人類が自由というものを飽くことなく求め続けてきた訳はそこにこそある。

しかし人類は今日まで自由を求めながらその実、真の自由の達成をこれまた飽くことなく回避してきた。忌まわしい暴虐の代表としての＜死＞という意識上への表出に恐れからか面と向き合って取組むことを自分自身のうちにタブーとして放置してきた。暴虐のあらわれを見て人はそれをもたらし^{もと}たしたもの^をを外にイメージし、それを対象として怒り怨むとい

バイロンの『シヨンの囚』一考察

う無自覚で原始的かつ短絡的な解決の仕方しかしてこなかった。絶対数からいって大抵の人間はどうしても、自らが危機に瀕して初めて自身の内に生命エネルギーの訴えを聞くことになるものであるから、実際には死ぬ間際になって迫られるまで〈死〉と対峙することはなかなかあり得ない。しかしそうなるからではいつも一から一人で解決しようとすることになるから自我意識の自由にとっては余すところ時間もなく既に手遅れで、それが延いては人類全体の自我意識の地平線が旧態依然のまま開けず、彼方に死のテーマを懸案として未だに抱えていなくてはならない原因となってきた。しかし今や現代人は揃って正に危機の最大最終のものに晒されて、誰もが否応なしに死と対峙しなくてはおれなくなった（それも^{こぞ}挙って時間をかけてちょうど詩人が既に自我意識の層で対応していたようにその後を受けてである）。それにもかかわらず尚詩人の感傷が何かこちら側の現実とは感覚的に遊離し大袈裟に写ってしまうだけであるとしたら、現代人がその〈怒り怨み〉となる感情の対象（捌け口）を見失って無意識のうちに既に絶望しており、詩人の情熱に不感症になっている訳だが、それは全て対象が外界にあるものとのみ思い何もかも即物的に見てしまおうとするため自分の外にばかり気が行くからだと考える。故に、現代人が本当に詩人に、少なくともこの作品に意味を感じないとしたら、何の解決も見当る筈がないのにどうしても自分自身の目を外に向ける性向から、詩人の感情の対象もやはり外の現実実際にある暴虐に向けられているのだとしか見ないから、そこにあるのは詩人がもてはやされた時代にのみ通用する反逆精神と単なる感傷だけとなる訳であるが、それは現代人も未だに〈死〉を知らないうちにタブーとして、向き合うことを避けて通ろうとしているからであって、詩人が〈死〉という人類普遍のそして畢竟のテーマと格闘しているのに、その際の心情を反逆精神だの感傷だのとしてその根本のところ（死のテーマ）を見逃し、更にその根本のところが現代人も自我意識の上で未解決のまま未だに蓋をしているところであることをも捉え損ねているのである。

詩人の目指している窮極のところは自我意識の自律性である。〈自由〉というのも畢竟〈死〉に代表される暴虐のない自我意識の境地であり、〈怒り怨み〉にしても自由を阻む暴虐に対して向けられる意識の深部に支えられた自我意識の自律しようとする念願の発露なのである。そしてこの念願は現代人のみならずもともと人類普遍の〈自分〉の中にあるもので、その同じものを詩人に見ている訳だから、気付かずに詩人を捨てることは自分自身に^{そっぽ}外方を向くと同じである。もっとも詩人の〈死〉との格闘も勝利している訳ではない。そこに暁までは示されてはいない。それは、しかし、人類にとっての解答に対する、近代自我に伴う知性というものの限界であろう。それを、詩人と同じ地平に立っているのに、現代人はどういうものか錯覚して自分達は詩人より先に進んでいて詩人はもう古いと思い込んでしまっている。詩人を古いあるいは意味がないとして放置してしまうことは、

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

詩人の内にあり現代人の内にもあるものを又もや見過ごし放置してしまうことに繋がる。しかしこのところをなおざりにして放置すれば何時まで経ってもその＜怒り怨み＞は昇華されず、覚醒したエネルギー自体がその捌け口を求めて止まない。自我意識がその方向を間違ってしまうと＜外＞に核戦争という最終的な憤懣の爆発も起りかねない。核戦争にしても自由を求める心の裏返しであるが、そのエネルギーを＜内＞へ、どのように向けるか、それが課題である。それは自律したいと希求する自我意識が、＜自分＞自身が死ぬということとどう溶け合うか、ということであろう。

以上のように、詩人の感傷が現代にも通用するかという疑問から、詩人と作品を＜エネルギーとその放出＞即ち一人の人間の普遍的な一つの現象として見てきた訳であるが、このような視点からすると、その創作態度から意識下のものが多く表出してきている詩人であることを認識すれば、この詩人も現代に通用するものを十二分に持っているのではないかという気がしてくる。

注

- (1) Thomas Moore, *The Works of Lord Byron : with His Letters and Journals, and His Life* (17 vols ; London : John Murray, 1835), X, p. 239 (*The Prisoner of Chillon*, XII, 322-23).
以下、括弧内の数字は同テキストからの引用の節・行を表す。
- (2) レマン湖 (Lake Lemman) と通称され、作品でもこちらの呼称が使われている。
- (3) ジュネーヴの愛国者。Lompnes の領主 (seigneur de Lompnes) である Louis Bonivard の息子で、フランス東南部地方 Savoy の Seyssel 生れ。ジュネーヴに近い St. Victor の小修道院長としておじの跡を継ぐと、サヴォイ公 (duke of Savoy) である Charles III 及びその血筋であるジュネーヴ司教 (the bishop of Geneva) が行った市の自由に対する侵害に反対し始めた。サヴォイ公によって、Gex の地で 1519 年から 21 年にかけて投獄され修道院を失うとますます反サヴォイとなった。1528 年にはジュネーヴ市 (the city of Geneva) によって支援され、彼の教会の収入を奪った者達に対して武器をとったが、1530 年には再び大公によって捕えられシヨンの城に投獄された。そこで彼は、1532 年から、ベルン人が 1536 年に彼を解放するまで地下に閉じ込められていた。プロテスタントになって、彼はジュネーヴから恩給を得て 4 回結婚した。
- (4) 代表的なものとして、*Manfred* (1817) や *Cain* (1821) などがその系列に入れられる。
- (5) *Don Juan* (1819-24) の他、*Beppo* (1818) や *The Vision of Judgment* (1822) などが挙げられる。
- (6) Peter Quennell (ed.), *Byron : A Self-Portrait* (2 vols ; London : John Murray, 1967), I, p. 226 : To withdraw myself from myself (oh that cursed selfishness!) has ever been sole, my entire, my sincere motive in scribbling at all ; and publishing is also the continuance of the same object, by the action it affords to the mind, which else recoils upon itself.
- (7) Bertrand Russell, *History of Western Philosophy* (London : George Allen & Unwin, Ltd., 1971), p. 721.
- (8) Moore, *op. cit.*, p. 238 (X, 284).
- (9) *Ibid.*, p. 239 (XII, 318-25).
- (10) *Ibid.*, p. 230 (IV, 73-91).
- (11) 聖なる色としては、white, azure, 数としては、one, three, seven, 生物としては、bird, eagle な

バイロンの『シヨンの囚』一考察

どが挙げられるが、物語の場面が地下牢であり、主人公がその中に囚われているという関係から、その状況にまつわるイメージの色・数・生物も勿論出てくる。以下にそれらも一緒にまとめると：〔色〕white (I, 2), white-wall'd, white sails (XIII, 339-40) 聖性, 光明, (永遠なる) 生命, 精神的恍惚感とエネルギー; azure (X, 268) 天界, 天空, 希望; green (XIII, 344) 復活, 永遠, 不滅, 母なる大地の豊饒, 生命, 自然, 愛; grey (I, 1) 苦難, 懺悔, 哀悼, 繁茂, 復活 (たとえばキリスト), 中立, 禁欲, 放棄 / 〔数〕one (I, 17, 18, 21; III, 49) 統合, 神秘の中心, 宇宙を創り維持する最高存在, 神 (キリスト教); three (I, 25; IV, 69; XIII, 346) 聖なる (霊的な) 数字で, 3 相を持つ神々と関連する, 創造性; seven (I, 17; II, 27, 29) 太陽の神聖さ, 清め; six (I, 18) 完全, 調和, 創造, 進化, 豊饒; two (I, 21) 両極, 生と死 / 〔生物〕bird (X, 252, 268) 神の表象, 霊化, 自由; eagles (IV, 81), eagle (XIII, 353) 神の尊厳, 地上から離脱する霊や魂; mice (XIV, 383) 生贄; spiders (XIV, 381) 絶望と希望; fish (XIII, 351) 生命, 豊饒, 性欲を表す。

(12) Moore, *op. cit.*, p. 223.

(13) *Ibid.*, p. 241 (XIII, 362).

(14) *Ibid.*, p. 241 (XIV, 370-74).

(15) *Ibid.*, p. 241 (XIV, 368-69): 主人公が囚われの状態で, I had no hope my eyes to raise, / And clear them of their dreary mote; と述べているところなど, 現代人が希望の確信を喪失している心理状況と全く相通じるものであろう。

(16) 麻薬に限らず感覚を麻痺させるもの一般の氾濫がこのことを裏付けるものであるかもしれない。

(17) *Ibid.*, p. 234 (VIII, 176).

(18) *Ibid.*, p. 241 (XIII, 365).